

バレーボールの歩みと今後の動向

高橋 和之*

はじめに

1895年に産声を上げたバレーボールは1995年に100年を迎え、近代スポーツ及びオリンピック競技の中核的種目として位置づけられるまでに発展してきた。考案者のウイリアム・G・モーガン氏は、1895年「老若男女誰でもが気軽に取り組み、身体接触がなく、安全に楽しめるスポーツはないだろうか」と考え、「ミントン」^{注1)}というスポーツからヒントを得てこのバレーボールを考案した。当初この競技は「ミントネット：Mintonette」と呼ばれていた¹⁾。

筆者はアメリカで誕生したスポーツ種目の中で、バレーボールは異質に見える。なぜだろうか。何かアメリカ的ではないような気がする。これはテニスやバドミントン等がネットを使用する「ヨーロッパ型のスポーツ」だからではないだろうか。アメリカで誕生したスポーツはアメリカンフットボールや野球、バスケットボール等、結果として身体接触が不可避な肉弾戦の要素が数多く含まれているスポーツ種目が多いからである。

このような観点から見て、バレーボールが当初アメリカよりむしろヨーロッパ、特に東ヨーロッパを中心に栄えたことに興味をおぼえる。東ヨーロッパでは1910年代の第1次世界大戦時ロシアの舞踊団が各地に慰問に行き、合間にバレーボールを楽しんだといわれている²⁾。当時の東ヨーロッパは社会主義国家、共産主義国家であり、国策の一つとして東ヨーロッパ各地にバレーボールが広まっていったのである。

1. 東ヨーロッパの思想とバレーボール

バレーボールをアメリカで誕生した「ヨーロッパ型スポーツ」とみるならば、その競技特性は当時の東ヨーロッパの思想に近いスポーツとも言えるのではないだろうか。バレーボール競技における一人あたりのボール保持時間は一瞬であるのに対し、他のボールゲームでは、ドリブル等の技術を用いてボールをキープし、得点のチャンスを窺うことが出来る。バレーボールはボールを落としたり負け、3回以内に相手に返球できなければ負ける競技である。ラリーが続いている間は一瞬たりとも気が抜けない。コート内ではボールを落とさないように気持ちを集中させ、繋いで

で繋いで攻撃に持っていく。その過程には、集団の目的達成のために個人を犠牲にするというような思想がみられ、全体の中での自分というものを強く主張することができなくなってしまったような気がする。

アメリカ生まれの代表的スポーツの一つであるアメリカプロバスケットボール界では、つい最近まで個人のショー的要素を強調するために、ゾーンディフェンスを禁止しマンツーマンディフェンスを採用していた。この方法であれば1対1の相手をかわしてダンクショットで豪快に得点することが出来る。バスケットボールゲーム中のワンマンショー的プレーとしては一番典型的なシーンであろう。しかし、プロ参加が認められたオリンピックルールでは、ゾーンディフェンスという守備戦術は禁止されておらず、アメリカドリームチームといえども、自分たちが慣れていないゾーンディフェンス主体のヨーロッパチームに大会を重ねるたびに次第に追いつめられてきた結果、オリンピックで金メダルを獲得するために、プロリーグ（NBAリーグ）のルールにゾーンディフェンスの解禁に踏み切ったとマスコミにも大きく報道されている³⁾。しかし、やはりバスケットボールの醍醐味は、ダンクショットであり、また3ポイントシュートであることは誰もが認めることである。要するにバスケットボールでは、個人技が大きな魅力になっているのである。

一方、バレーボールでは観衆に対しての一番の見せ所は、いうまでもなく攻撃（スパイク）であろう。ワンマンショー的プレーといった点から見ると、スパイクという技術が最もそれに近いが、指導者もまたプレーヤーもどちらかといえばワンマンショー的なプレーはあまり好まない傾向にある。筆者の偏見となるかもしれないが、むしろ三段攻撃に代表されるように、バレーボールという競技では、レシーブからトス、トスからスパイクへと組織的にそして流れるような一体感のあるプレーが要求される。

このような見方をすれば、バレーボールは勝利を得るといって全体目標のために、「チームの攻撃（スパイク）のために途中の過程（レシーブやトス）がある」という考えが最優先されることが多い。当然といえばそれまでだが、途中の過程（レシーブやトス、つなぎのプレー等）においては目標達成のため犠牲的な精神を強要されたり、場合によっては裏方に回ることも要求される。日本が世界のトップクラスに君臨していた60年代から70年代、筆者はそのように感じたが、最近では「個を全体のために」という考えに基づく指導方法はあまり見られなくなってきた。これはマスコミ、テレビの影響かもしれない。テレビによって個人のプレーが数多く映し出され、役割分担はあったとしても全員がスターになった結果、スポーツというゲーム場面で、

*日本女子体育大学

注1) ミントンはインドボンベイ州プナーあたりで行われていた球戯で、長柄のラケットを使い、毛糸のボールを7フィート以上の高さのネット越しに打ち合うゲームである。なお、バレーボールの起源については、本学会の前身であるバレーボール研究会の設立総会で、水谷豊氏にご講演を頂いた。

犠牲とか裏方という表現が死語になってきたと考えられる。

民主主義・資本主義国家における思想は、「個人の尊重」であり、目的達成のために個人を犠牲にすることは好ましくない。国があって個人が存在するのではなく、個人一人一人がその国を形成しているという思想ではないだろうか。民主主義と社会主義。資本主義と共産主義。このような主義・思想の観点から見た場合、極論だがバレーボールという競技が思想的には社会主義・共産主義的に見えてくる。上述したように、自チームの最終目標とする攻撃までの過程において、個人的な感情や思惑を排除し、何が何でも目標達成に向けて全力を尽くすことが求められる。当然他のスポーツでも同様のケースが存在するが、バレーボール競技の技術、特に守備技術においてはボールを床に落としてはならないという基本的な考えが強いからではないだろうか。

バスケットボールはアメリカ国内で誕生当初から多くの支持を得て、プロバスケットボールに発展するまでになったのに比べ、バレーボールは同じ国内でバスケットボールと同様の支持が得られなかったのはなぜだろうか。バレーボールの持っている競技の特性がアメリカ国民に積極的に受け入れられなかったのではないだろうか。アメリカはこれまでプロバレーが誕生しては消滅するというパターンを20年近く繰り返している。

一方1920年代、30年代には旧ソ連や東ヨーロッパ地域の社会主義・共産主義国家でバレーボールを国技とまで言わせ、国策としてバレーボールを採用するまでに至った。国策とまで考えたバレーボール、その魅力は一体どこにあるのだろうか。その国のリーダーの人物が積極的にこのバレーボールを導入していったねらいは一体何だったのだろうか、非常に興味を覚える事である。

2. 国際大会開催と日本の貢献

4年に一度のオリンピック大会、そしてオリンピック大会の2年後に世界選手権大会。このような開催サイクルは国際交流が盛んになるにつれて、また他のスポーツの影響によって少しずつ崩れていった。世界選手権大会、ワールドカップ、アジア大会、ジュニア世界選手権大会、ユニバーシアード大会、ワールドグランプリ、4カ国対抗、各国主催の国際招待試合等、今や世界中いたるところでバレーボール国際大会が目白押しに開催されるようになってきた。またイタリアのプロバレーが象徴するように、世界のバレーボール界のプロ化が急速に進み、各チームのプロ契約選手が当たり前になってきた。このような国際大会激増の状況下で、日本のバレーボールはどのように変化していったのであろうか。

1964年オリンピック東京大会で女子が金メダルを獲得して以来、バレーボール競技は国内における人気あるアマチュアスポーツの上位にランクされ、ミュンヘン大会で男子が金メダル獲得でその勢いは頂点に達したといっていよう。その後モントリオール大会で女子が再びチャンピオンに返り咲き、日本のバレーボールは国内では不動の地

位を築いたかに見えたが、国際大会が次第に増加するにつれて、ロシア、中国、キューバ、アメリカ、ブラジル、イタリア等、アジアのみならず南北アメリカ、東西ヨーロッパへとその勢力分布は拡散されていった。今やバレーボールは1960年代前半の日ソの戦いから、5大陸全ての戦いへと激変していった。国際バレーボール連盟(FIVB)に加盟している国・地域は2002年1月現在で218カ国を数え、世界のほとんどの国・地域が加盟している。サッカーやバスケットボールと並んで、球技では世界の三大スポーツの一つと言えるのではないだろうか。

ここまで発展し且つ地位を築いてきたのは、言うまでもなく国際大会の影響が大きく関与している。国際大会を開催するには、会場費、旅費、宿泊費、役員にかかる費用等多額の経費を必要とし、その経費捻出には各国の事情や経済状況が大きく影響する。我が国の企業は経済発展国の一員として、1970年代頃から日本バレーボール協会を通して、国際連盟主催の大会経費の多くを分担してきた。日本の企業、スポンサーなくして国際連盟の運営は成り立たないくらい重要な支援国となっている。しかしバブル経済の崩壊とともに、その姿も少しずつ変わりつつある。

3. 経済不況の影響

オリンピックの主要競技種目となったバレーボールは、多くの国々から支持を受け、球技の中で国際的に重要な種目となっていった。日本ではチームスポーツ、特にボールゲームにおいて世界に通用する唯一のスポーツとして人気が高まり、オリンピック大会に毎回出場できるチームスポーツとして期待されている。1980年代日本経済は最盛期にあり、企業がスポーツに果たす主な役割は、代表選手の提供と大会開催協力(スポンサー)等であった。日本のスポーツもまた世界のスポーツも、ジャパンマネーに大きく依存する体制が自然に作られていった。

ところが、1990年の株価暴落と共にバブル経済も終り、各企業ともスポーツに対してこれまでのような支援体制は取れなくなってきた。スポーツチームや選手をこれまで企業のイメージアップや従業員の士気高揚に活用していた訳であるが、経済不況の嵐で最初にカットされるのは残念ながらスポーツ部門、特にチームや選手になってしまい、その影響たるやこれまで類を見ない休部、廃部が続出し、日本スポーツ界にそしてバレーボール界に大きな衝撃が走った。2001年には歴史ある日本女子バレーボール界の双壁、ユニチカと日立が相次いで休部や廃部に追い込まれ、前後してダイエーやイトーヨーカドーチームもチームや選手が移籍したことは記憶に新しい。男子も日本代表選手を数多く輩出した日本鋼管(NKK)を筆頭に同じような道を歩んでいる。今後日本経済が復興しない限り、このような企業スポーツの休部や廃部といった傾向はまだまだ継続するであろう。特に大勢の人数を必要とするチームスポーツ、中でも野球、バレーボール、バスケットボールの企業チームは最も被害を被っているといえよう。個人スポ

ーツと違ってチームスポーツであるが故に、チーム維持経費は3倍も5倍もかかってしまう。

このように日本も含め世界的な経済不況下で、各国ともビッグイベントには莫大な経費を必要とし、スポンサー無しで大会を開催することは全く不可能になってきている。オリンピック大会だけは別にして、世界選手権大会、ワールドカップやその他の国際大会全てが今経済危機に直面しているといえよう。しかし残念ながらその打開策はまだ明確に示されていない。アメリカと日本の経済復興に世界は期待しているのが現状である。

4. ルール改正とバレーボールのフィロソフィー

1964年オリンピック東京大会後、衝撃的なルール改正が行われた。結果としてそれはバレーボールの本質ともいえる「相手コートに侵入してはならない」という条項が崩れ去ってしまった。いわゆる相手攻撃に対するブロック動作が大幅に改正され、「ブロッキングのオーバーネットが許容された」⁹⁾ことである。このルール改正が及ぼした影響は計り知れない。なぜならこのルール改正によって長身者がますます有利になり低身者が不利になったことである。身長の高い選手の攻撃は長身者のブロックに押さえ込まれるケースが多くなり、結果として長身者が圧倒的に有利になったことは否めない。国内で9人制から6人制へと大きく変化した昭和30年代中頃と同様に、このルール改正は一時的ではあるが競技人口が減少したといわれている。6人制バレーボールは身長の高いものではない、といった感が強くなった時期である。また、1971年には「サイドマーカー外側にアンテナが設置され」⁵⁾、日本包囲網が作られていった。日本のコンビネーションバレーを阻止するためのルール改正が着々と進んでいったのが1960年代後半であろう。

4年に一度のルール改正という原則も次第に崩れ、1980年代から90年代には頻繁に改正された。1895年モーガン氏が考案した「手や腕でボールを扱う競技」から、1994年には「身体の中の部分を使っても良い」と言うことになり、その姿は極論だがこれまでのバレーボールにサッカーを加えたような姿にルール上はなってしまった。そして得点システムもサイドアウト制からラリーポイント制に移行し、サイドアウト制の持っている特徴が失われ従来のような逆転劇はほとんど姿を消してしまった。

ルール改正の意図は一体どこからくるのか？ ルールは選手のために存在し且つ観衆にとって分かり易いルールであることも当然である。得点システムのルール改正の意図はどこにあるのか。バレーボールもバスケットボールのように試合時間がある程度予測され且つ2時間以内におさまることが望ましい。しかし、サイドアウト制の国際大会では2時間を超える試合はごく一般的で、大会を運営する側およびスポンサーやTV局の方針（試合を生中継する時、2時間以内に終了すること）に沿ってこのラリーポイント制が採用されたと推測される。要するに試合時間の短縮で

ある。その他の要因として、観衆がサイドアウト制における得点システムが十分に理解できないところに起因しているとも言われている。バレーボールをよく知らない観衆にとっては、ラリーに勝ったチームに得点が入らないという不思議さがいつまでもつきまとい、それならばサーブ権は関係ないことにしよう。このラリーポイント制のルールなら誰でもがわかる、ということでルール改正に踏み切ってしまった。そして、国際大会ではテクニカルタイムアウト制を採用し、8点と16点時にコマーシャルを入れやすいように変えてしまい、最近の国内大会でも大きな大会はこのルールで行われるようになってきた。

主催者とスポンサーやTV局の意向はわかるが、しかしバレーボールが本来持っているゲームの楽しさは「逆転劇」が存在しているところにスリルや興奮、恐怖、感動があり、最後までゲームを捨てない、あきらめないという教育的な内容も十分に含まれていた。したがって、指導者も選手もそのセットそのセットに全力を傾注したからこそ、観衆に感動を与える好ゲームが生まれ、野球の逆転サヨナラホームランと同様、バレーボールも大逆転できるスポーツという競技イメージであった。

しかし、ラリーポイント制（1セット25点）では、勝敗の行方が途中（20点前後）で予測できる。20対16であれば95%以上の確率でリードしているチームが勝つというデータ分析結果が数多く報告されている⁶⁾⁷⁾。ラリーポイント制になってからは、得点が接近していない限り、最後の2、3点を勝ち取る白熱したゲーム攻防の姿が消してしまった。途中で逆転不可能と指導者が判断すれば、勝つためには次のセットに備えて準備しなければならない。残されたセットの後半の部分は、表現は悪いが消化試合的な内容になってしまう。勝利を考えれば当然の策といえようが、観衆は納得いくだろうか。逆転に望みをつないでプレーを続けるのがプレーヤーとしての使命である。

またラリーポイント制では、サービスの失敗によってセットが終了する場合や、ゲームそのものの勝敗が決まってしまうことがある。国際試合でも頻繁にこのシーンを見ることがある。なんとつまらない素っ気ない淡泊なルールだろうか。セットやゲームが終了した瞬間は感動が残ってなければならない、と感ずるのは筆者一人だけであろうか。そしてサービスを失敗した選手には、「自分のミスで試合が終わってしまった」という大きなダメージが後々までつきまとうことになる。

そして、これまで多くの指導者達は、球技の中で「バレーボールはサッカーやラグビーとは違う、バスケットボールやハンドボールとも違う」といった一線を画したものがルール上ははっきり存在していたと認識してきた。しかしルール上「身体の中の部分を使用してもよい」というようになってしまったからは、バレーボールの特徴が薄れてしまったと同時に特徴が消されてしまった感がしてならない。「手や腕でボールを扱うからバレーボールだ」と言い切れたが、今やそうとは言えなくなってしまった。実際のゲームにおいて確かに故意に足を使うプレーはあまり頻繁に出

現れないが、これまで長年指導に携わってきた者には、ルール改正の意図（身体のどの部分を使ってもよい）が充分理解できないことが多い。ただ単にラリーが長く続けばよいだけでは理由にならない。はなはだ疑問である。

5. 今後の動向

今日、スポーツは芸術と同様に切っても切り離せないくらい、我々の日常生活に密着した存在になってきている。大々的に国際イベントが開催され、観衆はその結果に一喜一憂しスポーツ大会そのものが商品価値を高め、一大産業としてますます肥大化してきている。オリンピック大会の肥大化に沿って他のスポーツも影響をうけ、マスコミやTVが大々的に報道する。そして選手は高額な年俸を得、青少年もその後を追うようになる。技術はますます高度化し、とても人間業と思えないほどの技に発展し、一般人とトップアスリートの技術差はますます大きく広がっていく。ここまで行くとスポーツも完全な芸術の領域になってくる。昔から「一流選手のプレーは芸術品である」とよく言われたが、この傾向は更に強くなっていくであろう。アメリカ大リーグで活躍中のイチロー選手を見れば理解できるはずである。

バレーボールがサッカーや野球のように巨大スポーツ産業として成立するであろうか？世界のバレーボール界ではプロ化が進んでいるが、バレーボールがサッカーや野球に肩を並べるところまで行けるだろうか。この点に関して残念ながら難しいと言わざるを得ない。その理由は、一つには選手の活動するスペースと観衆を受け入れる器があまりにも違いすぎるからである。3万人、5万人、7万人という観衆を受け入れることのできる競技場が多くの産業を生み出し、黒字に転化して初めてプロ化が成立する。

屋内競技のバレーボール競技において、3万人、5万人を収容できる体育館はほとんど存在しない。2万人収容できる体育館でも選手の顔すらはっきり確認できないくらいであろう。最もサッカーや野球でも選手の顔が見えても見えなくとも、観衆としては応援するチームが存在してれば良いのかも知れない。コート of の広さもバスケットボールより小さく、選手が動くスペースはサッカーなどと比較すれば限られた狭い範囲である。スポーツの持っているスピード、ダイナミックさ、高さ等は全く他の種目にひけをとらないが、少なくとも観衆が常時5000人から1万人以上入らなければ、プロスポーツビジネスとして成り立たないと言われている。

1980年代、ブラジルでサッカー場に特設コートを設置して「星への旅立ち」というキャッチフレーズでTVコマercialを流し、5万人以上の観衆を集めて大会を行ったと記憶している。その試合に限って商業的には成功したようだが、その後全く同様の規模での大会開催があったとは聞いていない。1回の打ち上げ花火で終わったようである。

日本で開催されるバレーボール競技大会で1万人前後観衆が入る試合は、年間で数試合しかない。プロスポーツビ

ジネスとしてバレーボールが成立するには、開催する試合に毎回1万人前後の観衆が入り、そして重要なことはスポンサーが付いてくれることである。観衆が少なくそしてスポンサーがつかなければ、選手の給与や年俸、チームの運営、大会の運営・管理等に大きな障害が発生してくる。野球がプロとして成立している状況や、サッカーが年を追うごとに苦しんでいる状況を冷静に直視する必要がある。

日本経済の不透明さに伴う企業スポーツの動向、日本社会の少子化現象、そして頻繁に行われるルール改正。どれ一つ取り上げてみても重要な事項である。ソルトレーク冬季オリンピック大会におけるフィギアスケートの審判採点疑惑や、スケート・ショートトラックの走路妨害判定基準の不徹底さ、ドーピングに関する取り扱い等は結果としてオリンピック大会自体と問題になったスポーツ種目のイメージダウンにつながり、スポーツの根幹を揺るがすことになってくる。

バレーボール界において、現在直接イメージダウンになるような出来事は少ない。しかし企業チームの撤退が相次ぐ中、少子化現象で青少年の参加率が激減し、学校における課外活動が様変わりしてきている。今や一校で一チームを編成することさえ難しい状況に立たされ、他校との連携で参加の道が開かれようとしている。そして学校教育の延長線上で育ってきた日本バレーボール界も、少しずつその手から離れようとしてきている。欧米諸国は日本と違ったシステムでスポーツを発展させてきたが、これからの日本は欧米型になりつつある。

スポーツは運動文化であり、我々はこの文化としてのスポーツを後世に伝承しなければならないと同時にまた発展させなければならない。スポーツの持っている本来の姿、バレーボールでいえばエキサイティングなゲーム展開や、逆転また逆転のシーソーゲーム。そして若年層には人間教育的スポーツであり、青少年には挑戦的スポーツとして、そしてトップクラスの人達には可能性の限りなき追求といったバレーボールであって欲しいと願うのは筆者一人だけであろうか。

21世紀、日本のバレーボールが多くの人々に支持され、感動を与えそして共感を生み出すためにも、ルールの見直し、指導体制やシステムの見直し、戦術の開発研究が急がれる。

参考文献

- 1) 水谷 豊：体育科教育，第30巻12号，1982，11月号。
- 2) 高橋和之：バレーボールのゲームづくり，道知書院，1984。
- 3) 朝日新聞：復活スピードバスケ，2001年11月3日。
- 4) 池田久造：バレーボールルールの変遷とその背景，日本文化出版，p 289，1985。
- 5) 池田久造：バレーボールルールの変遷とその背景，日本文化出版，p 309，1985。
- 6) 米沢利広，松本勇治，俵 尚申：バレーボールゲームにおける勝敗の予測，一大学女子バレーボールについて，バレーボール研究，vol. 2, 2000, pp 29-34。
- 7) 小川 宏：ラリーポイント制では何点差で勝負が決まるか ～世界トップレベルにおけ勝利確率の理論値と実際～ バレーボール研究，vol. 2, 2000, p 66。